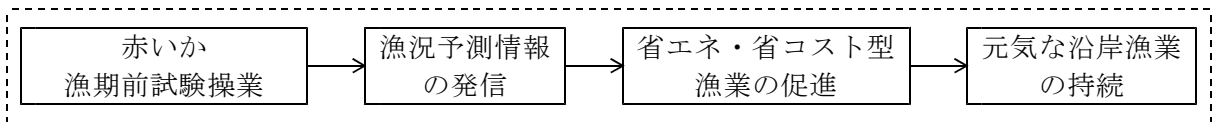


9. 赤いか（ソデイカ）資源動態調査

- (1) 担 当：太田武行（増殖技術室）
- (2) 実施期間：平成5年度～（平成22年度予算額：沿岸漁業重要資源調査8, 517千円）
- (3) 目的・意義・目標設定：

沿岸漁業の重要対象種（底魚類・浮魚類等）の資源動向と漁獲実態に関する調査を行い、漁業者への資源管理方策の提言及び省エネ・省コスト型の漁業経営を促進するための情報発信を行う。

(4) 事業展開フロー



(5) 取り組みの成果

【課題1】：赤いか漁期前試験操業

1) 目的

近年、本県の夏季～秋季の沿岸漁業を支える重要な資源となっている赤いかについては、その生態学的知見や資源学的知見は非常に少なかったが、平成16～18年度の3年間農林水産技術会議の委託研究に採用され、兵庫県、近畿大学、九州大学、水産大学校、日本海区水産研究所との共同研究が実施され、本種の基礎生態に関する情報の収集を行った。本事業はこれまでに得られた情報と漁期前試験操業により赤いかの漁況予測情報を発信した。

2) 方法

- ・鳥取県漁協賀露本所所属の組合員の漁船を2隻用船し、平成22年8月20日に試験操業を実施・試験操業は、樽流しで行い、A船（沖側）は36樽、B船（灘側）は36樽を使用した。
- ・試験操業場所は、賀露沖水深140～240m（北緯35°41.433～35°45.170，東経134°10.131～134°13.975）であった。

3) 結果

- ・平成22年の漁獲量・金額は、59トン、30百万円でH21年の186トン、79百万円から大幅に減少した。
- ・平成22年は8、9月水揚げも極僅かで、また、漁獲物組成も昨年同時期に比べると小型であったことから、初期の来遊群の加入が不調だったことが示唆された。
- ・近年8月には試験操業で来遊が確認されていたが、平成22年の試験操業では、当たりもなかった。

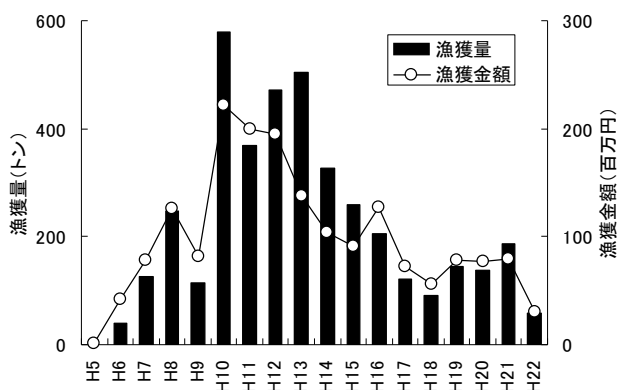


図1 鳥取県の赤いかの漁獲量と金額の推移

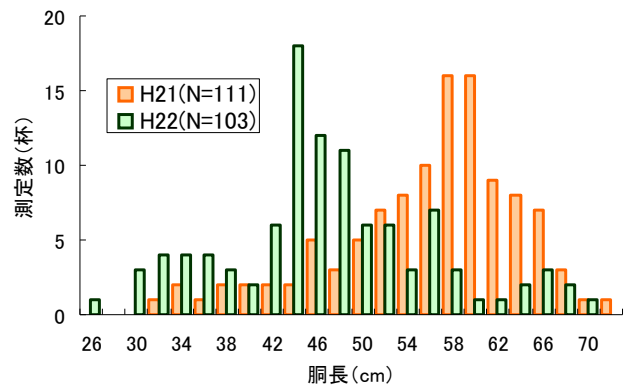


図2 賀露地方卸売市場における11月中旬の赤いかの胴長組成

4) 考察

今期の漁獲量は、図3のとおり100トン未満と予測はしていたものの、予測以上に漁獲量が少ない結果となった。この漁獲量の不漁は、平成21年前半の低水温の影響により、漁獲の中心である早期来遊群（対馬海峡を6～7月に通過する群）が少なかったため、赤いかの来遊量は少なく、漁期が遅れ、サイズも小さかったため、漁獲量が昨年と比べ大幅に減少したと考察された。その他にも、赤いかの餌であるスルメイカの漁場が夏期に山陰沖に形成されなかったことも原因のひとつと考えられた。

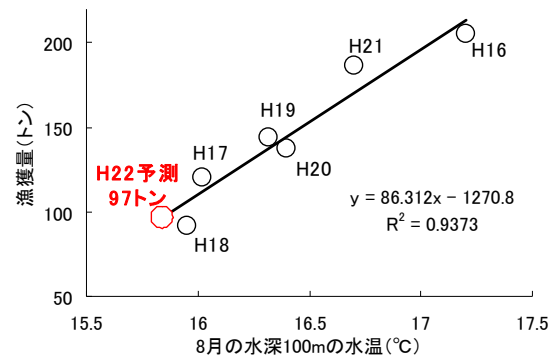


図3 鳥取県の赤いかの漁獲量と鳥取県中部の8月の水深180m地点の深度100m水温

5) 残された問題点及び課題

漁場が沖合であることもあり、漁況予測を行うことは、沿岸漁業者の省エネ・省コスト型漁業への促進に必要な情報であり、引き続き調査が必要である。